

## 記憶の持続性 —災害文化の継承に関連して—

首藤伸夫

### 1. はじめに

犠牲者 30 万人とも云われる 2004 年インド洋大津波の際、震源に極めて近いインドネシア・シムル島では、7 万 8 千人の住民のうち、死者は 7 名に止まった。しかし、97 年前には数千人もが犠牲となっていたのである。1907 年には、地震後水が大きく引き、飛び跳ねている魚を拾っていた村人が、続いて襲来した大津波のため命を奪われたのであった。この経験から、「地震後に海の水が引いたら、山に逃げろ」と言い伝えられていた為、海岸沿いの住民が高台に速やかに避難したからであると云う[朝日新聞 2005 年 1 月 19 日記事]。

地震後に海水の引きが先行せず、津波が押し波として来襲することもあるから、以上の言い伝えは 100% 正しい訳ではないが、100 年近くの前の経験がこれほど見事に役立ったのは、かなり珍しい例である。一般には、10 年一昔で記憶が薄れ、更に土地の自然を知らない新住民の移入などで、津波に脆弱な体質に変わってしまう方が多い。ここでは、時間経過と経験の持続性に関して過去の例をまとめ、どうすれば災害文化を継承できるかの参考にすることとする。

### 2. 失われる記憶

#### 2.1. 8 年経過後

河田・泉 (1993) の示す例が参考になる。これは高知市の、仁淀川・鏡川氾濫域住民へのアンケート結果について考察したものである。この場所は、1965 年以降 1976 年まで毎年のように浸水被害が発生した。なかでも 1975 年、1976 年には最大規模のものが生じたが、その後しばらくは水害被害は殆ど起こっていない。

このような条件下に、高知市が約 10 回のアンケート調査 (回答数はいずれも約 4,000 人) を行っている。その中で、「市政全般を見わたして、とくに力を入れて欲しいと望む施策は何か」と云う問いへの答えを示すのが、図 1 である。

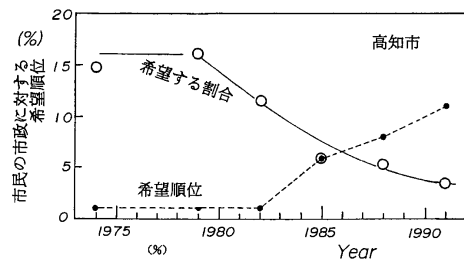


図 1 高知市民の防災対策志望順位とその割合

図中の黒丸のように、1982 年くらいまでは、防災対策が第一位の要望であったのだが、それ以降徐々に関心が薄くなり、1991 年には回答例 26 項目中、11 位にまで低下した。なお白丸は防災対策を希望した回答者の割合である。

これについて河田・泉は、「激甚な災害が発生すると、地域住民には 8 年間ぐらい日常的な最関心事項となっており、また関連の復旧事業の主たるものがその程度の期間継続することも影響していると考えられる。このことは、被災から 8 年経過した前後に、防災訓練や防災教育を徹底すれば、再び住民の防災への関心を高めることができる可能性がみいだされる」としている。

#### 2.2. 10 年経過後

##### (1) ジュグラー波

バブル経済について、石川英輔 (1992) が

次のような感想を述べている。

「かつて、バブル経済という社会現象があった。

あの時につくづく感じたのは、人間の判断力とは、ある傾向が三年続けば当分続くと思ひ、五年続けば半永久的に続くと思ひ、十年続けば未来永久にこのままの状態が続くと思ひ、程度の浅はかなものらしいということだった。将来の人手不足におびえて毎年千人以上もの新卒者を採用した大企業が、バブルが崩壊すると、慌てて採用をゼロにしたなどという話も聞いた。」

この辺の事情について、チャンセラーの「バブルの歴史」(2000)を引用すると、

「1825年のあとも、ほぼ十年間隔でブームと危機が起った。十九世紀末に、フランスの経済学者、クレメン・ジュグラーがこれを分析し、約十年周期の循環を『ジュグラー循環』と名付けた。……」

ジョン・スチュアート・ミルによれば、ブームはいずれも、前回の危機のときに種が蒔かれる。信用の収縮によって資産価値が極端な水準まで下落し、資産を割安な価格で買えるようになるからだ。その後、資産価格は極端な低水準から上昇し、投機が復活する。危機が終わるとそのたびに、金融市場は過去の愚行と損失をきれいさっぱり忘れ、明るい未来を夢見るようになり、またしても、愚かとしかいかえぬほど信じやすくなる。パジョットによるなら、資本は見境がなくなる。投資家は過去を簡単に忘れてしまうので、何度も失敗をくりかえす。」のである。

## (2) 三陸津波の後

三陸地方は1896年6月15日(旧暦5月5日)に2万2千人以上の犠牲者を出した明治三陸大津波に引き続き、37年後の1933年3月3日昭和三陸大津波ではには3千人以上の死者行方不明者が出た。

この地方での津波対策としての集落移動を詳しく調べた山口弥一郎(1966)は、一旦移動した集落が原地へ戻る要因として、働き場

所である浜との距離や高度差、良い飲料水の得難さ、主要道路から離れていること、などのほかに津波来襲頻度を挙げています。

## 「〔二〕津波来襲の頻度

一八九六年の津波後一〇年を経る頃から原地復帰が始まっている。三陸海岸の津波は地震にともなうて起こるものであるが、地震は必ずしも津波をとまうとは限らない。災害当時は地震の度毎に津波来襲を恐れて避難していたこともあった。これが幾度も無駄になって、慣れて避難しなくなった頃、ただ一回の大津波に災害を受けるのである。津波がしばしば襲来して、その頻度が多ければ、当然集落は安全な所に移動している筈であり、災害防止の施設を完備しているわけである。

越喜来村下甫嶺では一度移ってみたが、当時八八歳の老婆が、小さい津波の記憶が三歳頃のものだけで、そうしばしば襲来するものではないと説いたため、移動地の不便もあって原地復帰になったという。」

低頻度が忘れさせるばかりでなく、折角の記憶が悪いほうに働く事もある。

## (3) 服部フェローズ

「天声人語 米ルイジアナ州バトンルージュに留学していた名古屋市の高校生、服部剛丈(当時16)が、ハロウィーンの訪問先を間違えて射殺された事件から今年で10年になる▼米国の銃社会を変えようと、服部君の両親が200万人近い署名を集めてクリントン大統領に会うなど、事件を契機に様々な動きがあった。その一つ、ルイジアナと日本の高校生の交換留学プログラムが資金難のため、このままでいくと今年で終わりにするという▼「日米の文化理解を深めることが服部君への一番の供養になる」として事件の翌年に日米の酒造会社が資金を出し合って始まった。6人ずつの高校生が毎年バトンルージュと名古屋市などに相互にホームステイし、交流してきた▼最初に米国を訪れたのは服部君の同級生だった。輪は次第に広がり、これまでに参加した「服部フェローズ」と呼ばれる高校生は40人を超える。米国からの参加者の中

にはその後、大学に進んで日本語を勉強している学生もいる。日本で英語教師になりたいそうだ▼現地在住の賀茂晶子さんが受け入れ先の手当てや、日本へ行く際の引率をボランティアで努めてきた。しかし賀茂さんによると、スポンサーが相次いで撤退するとともに、日系企業からの寄付が集まりにくくなった。相互訪問の規模は小さくなり、今年夏の米国から日本への4人が最後になりそうだという▼事件の強烈な印象も10年がたつと、遺族や友人を除けば薄れていくことがあるのかもしれない。若い世代の日米交流の一つの芽が絶たれるとすると残念なことだ。」(朝日新聞2002年2月14日)。

### 2.3. 15年経過後

1983年の日本海中部地震から15年経過した1998年5月24日、秋田県能代市文化会館において、建設省能代工事事務所主催の防災フォーラム「日本海中部地震津波から15年」が開催された。この参加者にアンケートを行い、492名から回答を得た(回収率82%)日曜日の開催であったから、参加者は比較的防災意識の高い人々であったと考えても良いであろう。

その人々の非常時に対する準備の状況として(1)災害時の非常持ち出しの準備、(2)災害が発生し家族がバラバラになった時の再

会場所、(3)自宅周辺の避難場所、に関して問い、これを15年前の被害の有無によって分類したのが表1である(パナックス・ジャパン、1998)。

被害を受けた人と無被害であった人との間に有為の差があるとは思えない。災害後15年も経過すると、折角の体験も現実の備えの充実には反映されていないと云ってよい。

### 2.4. 30年経過後

#### (1) 方丈記

鴨長明は承元2年(1208年)54歳のころ、日野に移り、方丈の庵を結んだ。建暦2年(1212年)に述作したのが方丈記であるという。

「又同じころとかよ、おびたしく大地震振ること侍りき。そのさま、世の常ならず。山は崩れて河を埋み、海は傾きて陸地をひたせり。土さけて水わきいで、巖われて、谷にまろびいる。渚漕ぐ船は波にただよひ、道ゆく馬は足の立ちどをまどはず。都のほとりには、在々所々、堂舎塔廟、ひとつとして全からず。或は崩れ、或は倒れぬ。塵灰立ち上がりて、盛りなる煙の如し。地の動き、家の破るゝ音、雷にことならず。家の内にをれば、忽ちにひしげなんとす。走り出づれば、地われさく。羽なければ、空をも飛ぶべからず。竜ならばや、雲にも乗らむ。恐れのかなに恐るべ

表1 日本海中部地震津波から15年後の住民の対応

日本海中部地震での被害の有無	災害時の非常時持ち出しの準備をしてある	災害時再会場所を決めてある	自宅近くの避難場所を知っている
被害あり 54%	はい 25% いいえ 74% 無回答 1%	はい 11% いいえ 86% 無回答 3%	はい 71% いいえ 27% 無回答 2%
無被害 45%	はい 20% いいえ 80% 無回答 0%	はい 12% いいえ 85% 無回答 3%	はい 60% いいえ 37% 無回答 3%
無回答 1%			

かりけるは、只地震なりけりところ覚え侍りしか。」(鴨長明・古貞次校注, 1989)

これは元暦2年7月9日(1185年8月13日)の地震で、理科年表などによると、近江・山城・大和：京都、特に白河あたりの被害が大きく、社寺・家屋の倒壊破壊が多く多数の死者が出たものであった。

それであるのに、  
「すなはちは、人みなあぢきなき事を述べて、いさゝか心の濁りもうすらぐと見えしかど、月日重なり、年経にし後は、ことばにかけて言ひ出づる人だになし。」(その当時は、どうにもならない事だとして、欲望や執念を捨てたかに見えたのだが、時間が経つにつれ、話題にする人さえなくなった)。

書いたのが1212年であるから、27年も経過すると忘れられてしまったのである。

## (2) 三陸地方での実績

三陸地方での高地移転とその後の経過について、先にも引用した山口弥一郎が別の論文(1972)で次のように述べている。

「四、集落移動が完全に実施されれば被害の無いことは知悉していながら、折角移動した集落が、数年にして現地に復帰する現象がみられる。一八九六年にも相当数の集落移動が行われたが、その殆どが現地に復帰して、一九三三年再度災害にあっている。一九三三年には罹災集落の殆どに対して集落移動が行われたが、既に若干の復帰がみられ、復帰しないまでも、原集落位置に若干の仮屋居住、新移入者の来住があつて、完全な退避が行われているとはいえない。

この事実は、集落移動に際してみられた種々な自然的並びに社会的制約性があることを裏書きして、古くから発達した集落の立地条件の如何に重要なものであるかを示している。

まず漁業を主生業とする集落を海浜から離すことは無理なことで、災害防止という一つの絶対的条件で、集落立地の種々な条件をどの程度に押さえきれるかに問題がある。これには水平並びに垂直移動距離、適地の選定、

海浜との交通路の整備、防災施設等十分考慮される必要がある。

又津波来襲の頻度が大であれば、集落の移動は勿論、移動集落の現地復帰を押えて安定させる。これには一八九六年から一九三三年までの三七年度の期間が、警戒気分を維持し、人間の災害記憶を新たにしておくには永過ぎるようみえる。しかしこれは人間の力では如何ともできないし、災害頻度のすくないことが勿論望ましいのであるから、集落の移動、現地復帰の大きな要因であることを確認して、たえず教育や記念行事、退避訓練等によって、警戒をつないでいく外ない。」

やはり、30年を越える年月が経験を風化させると認識している。

## (3) 30年一世代

「戦後五十年、私たちは幾つかの新しい概念と理念を信じてやって来た。その多くが半世紀経って見ると、現実におかしな部分を露呈するようになっていたのである。しかしそれで当然だろう。五十年経ってもまだ変わらずに済むものと言ったら……この世では希有の存在だ。

……(中略)……

第二次世界大戦によってあれだけ国中が焼け野が原になり、物資は何もなく、先端技術も遅れていた日本でも、戦後三十年経った時には、もう荒廃の傷跡は感じられなくなっていた。三十年はほんとうに一世代である。三十年経てば、その国民自身の力が、たとえ僅かではあっても見えて来なければならない。しかしアフリカには、その兆しのほとんど見えない国も珍しくない。」(曾野綾子, 2002)。

30年で世代が変わる事が、ここでも議論の前提となっている。

## (4) 弔い上げ

「自分の村か、そうではなくとも近い所に、自分の宗派のお寺があり、そこへ行けば葬式や宗教的な行事ができるというのが、日本人の個人の死をめぐる生活上の行事です。ご存じのとおり、法要は初七日から始まり、

四十九日、一周忌、三回忌、七回忌、十三回忌とつづき、三十三回忌で終わりとなるのが普通ですが、これはどうも日本で生まれた仏教行事のあり方のように、インドや中国では違っているようです。

・・・・(中略)・・・・

亡くなった人のための法事が三十三回忌で打ち切られるというのも、三十三年間という期間が、亡くなった人を心の中に記憶している家族がいる、あくいはその記憶が生きている期間と、ほぼ一致するからではないかと思えます。」(尾藤正英, 2001)。

### (5) 30年毎の落橋

ペトロスキー著「橋はなぜおちたのか」(2001)と題する本がある。

「構造事故とその原因についての論文で、シブリーは、いくつかの大型の金属橋の崩落を設計史の流れの中で分析し、それぞれが、スパン長の増加、よりきゃしゃにすること、解析に対する自信の増大、すなわち安全率の低下で特徴づけられる設計風潮の中で起こったことを明らかにした。

・・・・(中略)・・・・

それぞれのばあい、安定性や強度から見てある種の要素が二次的な重要性しかもたないような状況を構造形態の初期の事例では見いだすことができる。しかし規模が大きくなるにしたがって、その要因が一番重要になってきて崩落につながる。事故が起こるのは、受容されている設計アプローチが定める十分な強度を与えるのを技術者が怠ったからではなく、新しいタイプの行動を無意識に導入したことによる。開発の期間が過ぎていくとともにその設計方法の基礎が忘れられ、その妥当性の限界も忘れられた。設計の成功の時期の後、多少なりとも事故満足した設計家は、設計方法を度を過ぎて単純に拡張した。

・・・・(中略)・・・・

シブリーとウォーカーが研究した歴史事例を表 10.1 に挙げる。彼らが言うには、『深刻な観察というよりは議論のポイントとして』、ディー橋、テイ橋、ケベック橋、タコマ海峡

橋の崩壊は、ほぼ三十年間隔で起った。

・・・・(中略)・・・・

シブリーとウォーカーは、三十年の間隔というのは『ある世代の技術者と次の世代の技術者のコミュニケーション・ギャップ』を示すものかもしれないと考え、これは確かに説明の一つかもしれない。もちろん、新しい橋の形式は突然完全に出来上がって現れるわけではなく、製図台から現場まで構想が進むのに何十年もかかることがある。しかし、新しい橋の形式は一般に、完全完成までではなくても、その最初のもの建設が十分に進むまでは広く仕様を特定されない。新しい設計あるいは比較的新しい設計を試みる技術者は、第一原理からの推論に特別の配慮をし、あらゆる失敗の様態を予見しようとするだろう。ある橋の形式が『標準』となってしまった後には第一原理が忘れ去られがちになり、過去の経験からの漸進的外挿に払われる思考がますます少なくなり、設計上のより多くの決定が経験の少ない技術者にどんどん委ねられるようになる。そういう状況では、世代間のギャップが実際に広まることがありうる。」

そして、結論の項で次のような挿話を引用する。

「揚子江をさかのぼる中国のジャンクで旅行する若い技術者を扱ったジョン・ハーシーの小説で、その技術者は、川と同じく年月を経てもほとんど変わらない形の船に、危険な早瀬を乗り切る新しい方法が見つかることに驚きを示した。けれども、年老いた船の持ち主は、それが事実であると請け合った。『四十年ごとに新しい方法があるんだ。古いやり方なんだが、新しいと言われるのさ。川の船頭たちは、もっとよく知っている爺さんたちが死んでから初めて、新しい方法を見つけたと言いつてるんだ。』」

### 3. 失われなくてはならない記憶

災害の記憶が人を傷みつける事は、2007年現在では良く知られている。

1983年日本海中部地震津波の頃は、これ

への手当てが話題にされる事はほとんどなかった。その翌年、津波の記念日に秋田県沿岸を再訪して、記念碑に花を捧げる人から筆者自身が聞いた話がある。ある若者が津波に巻き込まれたものの助かったのだが、その後その記憶が突然湧いてくると忘れる為には酒しかなく、ついには身を滅ぼして、今では行方も判らないというのであった。

それから 10 年、1993 年北海道南西沖地震津波の頃には、被災した子供達を浜に連れ出し、当時の思い出を語らせようとしたテレビ・クルーが非難されるなど、一部に無理解な人々が居る一方で、心的外傷後ストレス障害 (PTSD) には治療が必要で、しかも治療できると考えられるようになった。1995 年阪神・淡路大震災後は PTSD 治療は常識となったと云っても良いであろう。

PTSD は、その病態を 1980 年にアメリカ精神医学会が明確に定義した。天災に遭った人の場合、30～59% が発病すると推測されているとの事である (マス, 1999)。

1997 年神戸で国際シンポジウム「災害とトラウマ-長期的影響とケアの方向性」が開催された。その中でマクファーレン (1999) が「自然災害の長期的転帰」と題する報告を行っている。

「自然災害は人類の歴史である。自然災害は、コミュニティと社会的ネットワークの破壊、そして人間の死あるいは人間の生活が破壊されるとはどういうことかを考える機会を与えてくれる。打ち砕かれた生活を再建するときに見せる人間の柔軟な能力には、目を見はるべきものがある。多くの人は、過去を『とりあえず脇に置く』ことができる。しかし、災害後の長期経過についての研究によれば、災害がもたらす精神的ないし身体的健康上の結果に苦しむ人も少数ながら確実にいるのである。」とは、報告が出版された時の前書きであるが、報告の中で

「災害から得る教訓で本当に大切なもの一つは、地域社会がトラウマの重要性に気づくということでしょう。

・・・(中略)・・・

1990 年から 92 年にかけてアメリカの 34 の州で実施された調査によれば、PTSD の生涯を通しての有病率は 7.8 パーセントであると報告されています。

・・・(中略)・・・

この調査でもう一つ分かることは PTSD の長期的な経過です。すなわち PTSD を発症した 60 パーセントの人は 72 カ月後までには改善するとされています。一方、その時点つまり 6 年後に改善していない場合には、適切な治療をその後受けなければ、症状が遷延するという示されているのです。言い換えれば、症状が残ってしまった場合、慢性で重い障害となることを意味しているわけで、これは今後神戸でも考えていかなければならない重要な点だと思います。災害が次第に過去のものになっていくにつれて、最初の心的外傷に結びついた長期的な症状を呈しつづける人たちのことは、容易に忘れ去られていきます。しかし、災害の傷跡は地域社会に長いあいだ影を落としつづけるのです。」

#### 4. 記憶を上手く繋いでいる事例 - 20 年毎の技術伝承 -

風見明 (2002) によると、

「式年遷宮と、もの作りのうえでの意義

式年遷宮を取り上げることは、突拍子もないことに思われるかも知れないが、日本のもの作り技術の伝承に大いに貢献してきた事実があり、また、そのノウハウ・教訓といったものを含んでいるので、取り上げざるを得ない。

一九九三年 (平成五年)、伊勢神宮の六十一回目の式年遷宮が執り行われた。式年遷宮は天武天皇の発案によるもので、一回目は持統天皇の六九〇年に行われ、途中南北朝時代の百年あまりの中断があったものの、今日まで継続された千三百年もの長い歴史を持つものである。式年とは規定の年という意味であり、伊勢神宮の場合は二十年目に当たる年である。

式年遷宮というと、まず、檜の白木造り・

茅葺きの端正な姿の新調された神殿を思い浮かべる。美しいと思うとともに、昔ながらの建築様式と技法が遷宮という行事を通じて伝えられているという思いを抱く。実は、伝えられている技術はこれだけではない。同時に新調される装束神宝と呼ばれるものの製造技術がある。この事実はほとんど知られていないのが実情である。

今回の遷宮では装束神宝の品目総数は約七百種、千五百点という膨大なもので、神殿の作り替えより余程大変だと思うくらいだ。装束神宝のリストを大きく分類してみると、次のようになる。

- ・糸を紡ぐ道具、生地を織る織機（ミニチュア）、衣服などの“衣”関連
- ・手箱、履（靴）、硯などの日用品
- ・刀剣、弓矢、馬具などの武具と馬具を見につけた木彫馬
- ・傘、扇などの儀式用具

現代風に分類してみると、繊維産業、家庭用品産業、軍需産業の製品から成る。なお、農漁業関連の農機具・漁具や“食”関連の調理器・食器などはまったく含まれていない。技術的には職工・木工・漆工など、伝統工芸技術のほとんどすべてを含んでいる。いずれも日本最高峰の人が作ったもので、外観は装飾を凝らし、美術品の域に達しており、神に奉獻するに相応しい格調高い品格を備えたものである。

・・・・（中略）・・・・

なお、式年遷宮の二十年という周期の意味についていろいろな説がある。神殿の檜の柱の立て方は、石の台座のない直接土の中に立てる掘って立て方式なので、柱がすぐ腐りやすい点から決めたという建築の観点からの説、親から子へ技術伝承するのにベストなタイミングだという伝承の観点からの説、宗教イベントとして見たとき、二十年というのは長過ぎも短過ぎもしない、ちょうどよい区切りだという説などがあり、いずれももっともらしい説である。説はこの他にもいくつかあり、同じくもっともらしいものである。こうした説が多く出ること二十年周期がいろいろな

観点から相応しいことを意味していよう。

式年遷宮の目的は常若（とこわか）、具体的には神の力をよみがえらせ、技術を伝承させることだという。なお、神道の常套として、この目的は暗黙のものであり、書き残されたものではない。遷宮ごとに作り替え・新調するシステムは、スタートから今日に至る千三百年もの間、技術を伝承させてきたわけであるから、この点目的通りに推移したといえる。こうした伝統は外国には例がなく、これ自体世界史上重要な意味を持つものであるが、技術伝承のモデルであり、千三百年もの伝承実績から、本質的なノウハウを秘めていると考えざるを得ない。」

上原真人（2006）も、この技術継承から必要という考え方を指示する。

「それでは、式年遷宮の意義は何か。20年とは伝統を再生産するために、必要最低限の年数であるとの説に賛同したい。式年遷宮では、社殿だけでなく、調度品や装束、紡織具・武器・武具などの神宝も新調する。諸々の儀式やしきたりも伝承せねばならない。つまり、式年遷宮においては、建造物・神宝（工芸品）・儀式が三位一体で、伝統と鮮度（清浄さ）を保つことが要求される。同じ技術で、同じものを再生産せねばならないのだ。技術は、弟子が親方から受け継ぐ。人生50年だった時代、多少の経験を積んだ20歳前後の弟子が親方から技術を受け継ぎ、次の弟子へ引き渡すには、20年以上を経過すると危うい。昭和天皇の大喪においては、宮内庁書陵部に先例を知る者がおらず、物議をかもしたと聞く。」

## 5. 記憶を繋ぐ為にはどうすればよいか

### 5.1. 災害には災害を

災害を思い起こすには、他人のものであれ、災害が良い引き金となる。

図2は、1980年代に入って、東海地震の発生が予想された静岡県民の対応の推移を示す。

当初、非常持ち出しや非常食を準備している県民の割合が高かったが、次第に減少しつ

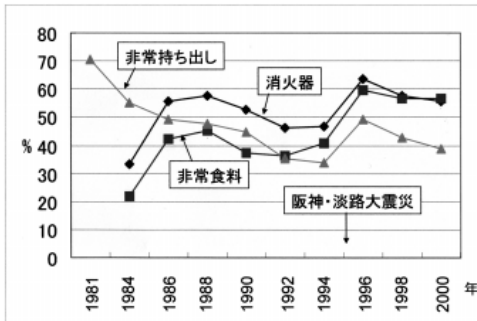


図2 静岡県民の地震に対する備え

つあった。そこへ1995年阪神・淡路大震災が発生すると、15ポイントから20ポイントほど上昇した(井野, 2000)。

もう一つの例として、岩手県田老町(現宮古市田老町)について見ることにしよう。

田老町は明治三陸大津波(1896年)、昭和三陸大津波(1933年)と再度にわたり全滅に近い大被害を受けた、人口約5,000人の町である。

元町長東信一氏は、小学校に上がる年の三月に昭和三陸大津波を経験した人である。その悲惨さを忘れぬように、津波対策を忘れぬようにと、全国津波サミットを提案・実施し、その功績に対して日本自然災害学会から功績賞を受賞した人である。また田畑ヨシさんのように、経験を紙芝居にして、幼稚園児にも津波の恐ろしさを伝える努力を続けている方も居る。

このように、町を挙げて、津波に対する備えや関心の高い所と云って良い。ここでの防

災訓練への一般住民参加者数の推移が図3である(田老町総務課, 2002, 2004)。防災訓練は、昭和三陸大津波の記念日である3月3日か、全国防災の日である9月1日の前後のいずれかに実施される。時によって異なるが、消防団や婦人防火クラブを含めた関連の参加は、300~400人程度である。

津波が関連しそうな地震がある度に、その次の参加者数が増加している。このことからみて、災害、しかも身近になるほど、ここで云えば田老町の海岸に警報が津波警報が出るような津波のあとには、参加者数が増加する。が、1997年から1999年までのように、せいぜい注意報、あるいは警報・注意報のない年が続くと、その翌年には参加者が少なくなってしまう。

いくつか、気になる現象がある。まず、1983年の日本海中部地震津波は影響していない事である。太平洋側でなかったからであろうか。

第二に、2003年十勝沖地震津波の後、参加者数が増えていないことである。実は、2002年9月8日に実施されて後、2003年には行われなかった。2003年9月26日には十勝沖地震津波が発生し、田老町にも高さ50cm程度の津波が襲来している。にもかかわらず、翌年3月3日の防災訓練では参加者数変化していない。

災害や危険を思わせる現象が起れば、それが備えようとする行動につながる事が多いのであるが、そういう反応とならない事も起り

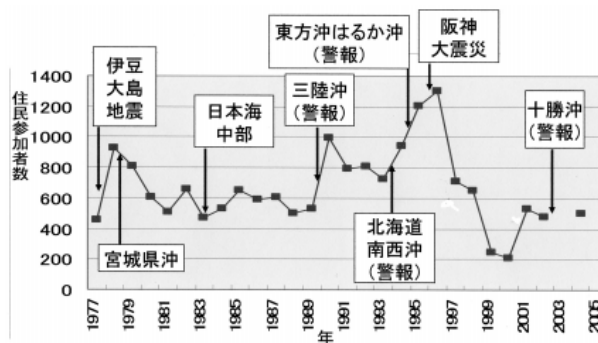


図2 岩手県田老町での防災訓練参加住民数



つつあるのであろうか。高齢化が進み、防災訓練を自分のものとする住民の割合が減少しつつあるからだと言う人もある。今後対策を考えるべき問題であらう。

## 5.2. キャンペーンの効果

災害以外にも、思い出させ、対応の準備につながるものがある。それは、意図したキャンペーンである。

このことについて、教科書問題に関しての岡崎久彦（2005）の見解を見てみよう。

### 「日本が火をつけた歴史問題」

その後の流れの全部を説明する紙数はないが、私個人の経験を辿って申し上げると次のようになる。

一九八四年から八八年まで私はサウジアラビアにいた。その間に、八五年には中曽根総理の靖国参拝問題があり、続いて別の教科書問題もあり、状況はさらに悪くなっていた。八八年に訪米した時に、たまたま、ペンタゴンの文書を見たら、日本の防衛力増強について周辺諸国の反応も考慮するというような表現があった。『これは何を言っているんだ？』と訊くと、先方も気がついて『これは何だろう？』と聞いて調べてくれたならば、日本側の公式文書から引用したものだと言った。

一九七八年から八一年まで、私は防衛庁出向時に国会答弁を三〇〇回したが、周辺諸国への配慮とか戦争の記憶とかいう言葉は一度も聞いたことがなかったし、もとより政府はひと言も言っていない。それが入っているのだ。

世界の歴史で大戦の記憶というのは戦後三〇年で消える。ナポレオン戦争の歴史的再評価が決まるのは、ワーテルロー後三三年たった一八四八年の革命以降である。大東亜戦争の記憶も戦後三五年たった一九八〇年頃にはもう過去の歴史になっていたのである。

その後、歴史問題が大騒ぎとなった頃、竹下総理は、そういう問題は後世史家の評価に待ちたい、と言った。その時はすでにそういう発言が通らない状況になっていたが、竹下総理の言ったことは、今、考えても正しいと

思う。

私は、その頃と思うが、内外の識者の集まりで、しばしば、『あなたがたは、日本は過去の歴史を反省していないし、十分謝ってない、とおっしゃるが、この問題はかつて完全に解決していた問題が、左翼的日本人の側から蒸し返したものです。もし疑うのならば、このうち誰か一人でも、一九八〇年という年を取ってみて、その一年の間に過去の歴史の問題に触れたことのある人がおれば証拠を見せてください』と質問することにした。

ある朝日新聞の記者は『一つもないことはないでしょう』と言って記事を探してみたが、見つからなかったらしく、その後何も言っていない。ハーバードのある学者は、『どうしてあの頃、私は言わなかったのだろうか？』と首をひねっていた。

人間の記憶は悲しいほど短いものである。中国、韓国の反日的言論はその源を訪ねればことごとく左翼的日本人により人工的に作られたものであるが、その一つの証左といっている。一九八〇年頃には、この問題がいったん解決されていたという記憶が全く失われているのである。」

## 6. 終わりに

以上をまとめると、表2のようになる。

人間は忘れやすい。大災害を経験するとその後8年位は、あのような災害が起こらない

表2 経験の持続性

年数	事 項
72ヶ月	この期間内に PTSD の治療必要
8年	大災害経験が重視されなくなる
10年	経験が楽観にとって変えられる
15年	経験は災害への備えに反映されない
20年	技術伝承できる、ぎりぎりの時間間隔
30年	吊り上げで代表される世代交代

ようにして欲しいというのが、被災者及びその周辺の住民の最大の願いである。

しかし、10 年も経つともう大丈夫なのではないか、自分だけは大丈夫だろうと考え始め、災害への備えより日常生活の便不便を優先し始める。

15 年経つと、折角の経験も災害への備えには全く関係なくなってしまう。

30 年で世代が変わる。ここではもう、経験もそれへの備えのノウハウも途絶えてしまう。

ただし、忘却しなくてはならないこともある。

非常な経験から 6 年以内に旨く処理しないと、一生心に傷が残ってしまうのである。

このように、忘れなくてはならない事もあるが、やはり大災害の経験を人間の智慧として残し、つないでいき、インドネシア・シムル島の例のように、100 年経過した後でも子孫が身を守るために役立てたい。そのためには、他所での災害毎での、あるいは年中行事としての退避訓練などが、やはり役立つと考えられる。マンネリズムにならず、若い世代が入れ替わっても、それに受けいられる方式を取り入れて行く必要があろう。

## 参考文献

- 朝日新聞 2002 年 2 月 14 日天声人語。  
朝日新聞 2005 年 1 月 19 日記事。  
アレキサンダー・マクファーレン (1999) : 自然災害の長期的転帰, ころのケアセンター編「災害とトラウマ」, みすず書房, 86-108.  
石川英輔 (1992) : 大江戸リサイクル事情, 講談社。  
井野盛夫 (2001) : 静岡県民の東海地震に対する防災対策の変化, 「2001 年防災シンポジウム in 宮城」資料。  
上原真人 (2006) : 掘立柱建物の寿命, 読売新聞 2006 年 1 月 13 日記事。  
エドワード・チャンセラー (山根洋一訳) (2000) : バブルの歴史, 198-199, 日経 BP 社。  
岡崎久彦 (2005) : 国家戦略からみた靖国問題, PHP 新書, 133-135。  
鴨長明 (市古貞次校注) (1989) : 新訂方丈記, 22-24, 岩波文庫。  
風見 明 (2002) : 日本の技術レベルはなぜ高いのか, PHP 文庫, 49-53。  
河田恵昭・泉 拓良 (1993) : 第 8 章 比較災害論による災害文化の現代的意義, 災害多発地帯の「災害文化」に関する研究, 平成 4 年度科学研究費研究成果報告書, 165-187。  
パナックス・ジャパン (1998) : 防災フォーラム「日本海中部地震津波から 15 年」アンケート結果。  
曾野綾子 (2002) : 部族虐殺, 64 ~ 70, 新潮文庫。  
田老町 (2002, 2004) : 平成 14 年度田老町総合防災訓練の実施結果等ついて, 平成 16 年度津波避難訓練実施結果。  
尾藤正英 (2002) : 「信頼の哲学」としての日本思想, 学士会会報, No.831, 96-109。  
ヘンリー・ペトロスキー (中島秀人・綾野博之訳) (2001) : 橋はなぜ落ちたのか, 設計の失敗学, 朝日選書, 186-203。  
デイビッド・マス (村山寿美子訳) (1999) : トラウマ, 講談社, 48。  
山口弥一郎 (1966) : 津波常習地三陸海岸地域の集落移動 - 津波災害防御対策実施状態の地理学的検討 -, 亜細亜大学教養部紀要, 第 1 号, 157-178。  
山口弥一郎 (1972) : 津波常習地三陸海岸地域の集落移動, 山口弥一郎選集, 第 6 巻, 428, 世界文庫。